

宮城山岳

第 26 号

2022 年 7 月



ベルナーオーバーランド地方（アイガー・メンヒ・ユングフラウ）

Miyagi Section of The Japanese Alpine Club

目 次

1	巻頭言・・・・・・・・・・支部長 千石信夫・・・・・・・・・・	2
2	2021 年度の月例山行記録・・・・・・・・・・事務局・・・・・・・・	3
3	2021 年度の山行以外の宮城支部活動記録・・・・・・・・事務局・・・・	1 3
4	2021 年度 宮城支部以外の行事参加記録・・・・・・・・事務局・・・・	1 3
5	紀行・随筆・エッセー・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1 5
	「太白山の登山道」、「二口谷の詩」・・・・・・・・高橋二義	
	「穴毛谷 3 月 2 日の記憶」・・・・・・・・・・千石信夫	
	「思いでの山『北岳』」・・・・・・・・・・ 富塚和衛	
	「浅間隠山と鼻曲山」・・・・・・・・・・千葉正道	
	「真昼岳登山を振り返って」・・・・・・・・・・加藤知宏	
	「『山岳』から読み解く 明治・大正・昭和戦前の会員たち」・・鳥山文蔵	
6	宮城支部定例事業の概要・・・・・・・・・・事務局・・・・	2 8
7	宮城支部収支会計報告・・・・・・・・・・事務局・・・・	3 0

表紙写真：アイガー・メンヒ・ユングフラウ（撮影：富塚和衛会員）

裏表紙写真：モンブラン（撮影：富塚和衛会員）

巻 頭 言

支部長 千石信夫

現代社会に生きる我々岳人としては、デジタル技術の進歩とともに、何かしらそのテクノロジーの恩恵を受けている。その技術のおかげで山の遭難などの事故防止につながり、より安全に登ることができていると思っている。

特に携帯電話から、さらに進化したスマートフォンには目を見張るものがある。GPS機能と地図が供えられ、登山コースとその所要時間なども全てが確認できる。ナビ機能では、予定ルートから外れると警告してくれる。今やラジオ、テレビ、電話、ナビ、カメラ、ビデオカメラ、メール、ショッピングなど、何でもできる玉手箱のような存在である。しかし、これには落とし穴があることを自覚して利用するようにしなければならない。そのスマートフォンでも万全ではない。圏外、電池切れ、故障など、機械である以上何かしらの事故は避けられない。そして天候の急変などの危険度は、むしろ高くなってきている。最悪のことを考えれば、基本は地図と磁石があって周辺の地形を判断し、現在地を確認することが基本であることには変わりがないはずである。

しかし、万全を期しても事故は必ず起きることを前提に考えれば、更に遭難救助のための機能を持ったシステムもある。「ココヘリ」などは元支部長の佐藤昭次郎氏も強く推薦している。やはり生命が全てに優先することなので、機械に頼り過ぎない程度で、今使える最新技術は自身の為、そして家族や関係者などの為に利用した方が良いと私も思っている。

これは7月2日に突然発生した携帯電話の通信障害で、私も通話ができず被害を受けたことから特に思ったことである。

さて昨年度の支部活動を振り返ってみるとコロナの影響があり、残念ながら思うようには活動ができなかった。主に公益事業は見送りとなり、共益事業である支部山行などは、ある程度活動できたものの、残念ながら当初の目標を達成することはできなかった。

古道調査については、各方面の有識者などに協力を求め、令和4年度の現

地調査活動に繋げるよう古道調査特別委員会で進めている。

新年度の支部活動からは通常の状態に戻り、会員同士の交流を深める懇親会も開催できるように心がけていきたいと思っている。

2021 年度 月例山行記録

【共益事業山行】

（１）梅雨払い山行（青麻山）

実施日 令和 3 年 6 月 20 日

山 域 青麻山（799m）

コース 北原尾登山口（420m）～カタクリの丘（641m）～756 山（756m）～あけら山（820m）～青麻山（799m）～往路下山

所用時間 登り 2 時間 40 分 下り 1 時間 40 分

参加者 会員＝千石信夫、千葉正道、冨塚和衛、冨塚眞味子、草野洋一、横山哲、鳥田笑美、加藤知宏

支部友＝村上敏郎、鳥田伊志、津久井宏、（ゲスト）野勢 計 12 名

報告者 千石信夫

青麻山の北原尾登山口からのルートは、「蔵王古道の会」の皆さんが整備されたルートである。支部の企画では歩いていないので、今回このルートを選ぶことにした。蔵王町ふるさと文化会館の駐車場に朝 8 時、12 名の参加者全員が集合した。登山口駐車場は広くないので、車を整理して登山口に向かう。遠刈田温泉を経由し北原尾の開拓地の牧場に向かい、牧場敷地一画の駐車場に車を停め登山開始。

駐車場から登山口までは西方の眺めがよく、不忘山、屏風岳、刈田岳、水引入道、烏帽子岳など見渡せるのだろうが、生憎雲に遮られていた。下別当登山口のルートからすると、とても解放感があって快適なところである。登山口からは風通しの良い広葉樹林帯の中を歩く。しばらくすると送電線の塔をくぐり抜け、間もなくカタクリの丘に着く。ここからも展望がよく一休み。“カタクリ

の丘”というからには、群生しているのだろうか、呟きながら休憩。

ここから尾根伝いに進むと“遠白広場”がある。白石と遠刈田の境ということだろう。立派な道標が出来ていた。青麻山方面と白石方面、遠刈田方面の分岐点となっている。道すがら、山椒の実が気になり思わず口に含む。香りと痺れるところがいい。

しばらくすると 756 山展望台があり、ここから蔵王の山々は勿論、遠刈田温泉の町が一望できる気持ちのいい所なので休憩する。折角なので記念写真となり、千葉副支部長のご友人でゲスト参加の能勢さんに撮影していただいた。写真の腕前はプロ



青麻山山頂にて

並みだそうだ。ここから 756 山までの道は、急な登り一辺倒となる。756 山を過ぎ、あけら山に到着、休憩後、青麻山までの鞍部となる急な下り坂が長く感じられた。最後の登りで青麻山に到着した。山頂から東方の眺めは雲の中であった。

山頂では、昼食後に参加された皆さんに、富塚支部長の後任に千石が支部長になったことをお知らせし、ご挨拶をさせていただいた。昼食後、同一ルートを無事下山、登山口で解散した。

感想——全行程の登山道はよく整備されており快適であった。梅雨の時期でしたが、まさに梅雨を払う山行となった。

（２）初夏山行（関山街道）

実施日 令和 3 年 7 月 17 日

山 域 関山街道（宮城県—山形県）

参加者 会員＝千石信夫、宇都宮昭義、富塚和衛、富塚真味子、太田正、横山哲、佐藤昭次郎、千葉正道、遠藤幸壽、草野洋一 支部友＝村上俊郎計 11 名

報告者 草野洋一

7 月の山行は公益事業として登山教室を予定していましたが、コロナ禍に対

応して教室は中止。代わりに共益事業として明治 15 年に関山隧道（旧国道）が開通するまで、山形県と宮城県を結ぶ通商路として使われていた古道の一つ、山形県境に跨る関山街道（嶺渡り）を歩きました。

朝 8 時、熊ヶ根駅（仙山線）に集合したあと、国道 48 号線の宮城県側の街道入り口（坂下御番所跡）の駐車場に移動。3 台は山形県側の下山口に車をデポ。快晴の中、出発（8：50）～旧国道交差部（9：15）～県境尾根（10：45）～関山ピーク（大峠 812m）～昼食（11：30～12：05）～山形県側下山口・林道（13：10）～分乗して宮城県側入り口駐車場へ～14 時、現地解散。

出発前に「関山街道フォーラム協議会」所属の遠藤会員から「関山街道」の解説をしてもらいました。同協議会は毎年、街道の草刈り等の整備をしているとのことで、宮城県、山形県ともに藪漕ぎもなく歩きやすかった。旧国道との交差部には「開発殉難之地」という 3 メートル余の大きな碑があった。

この先、梯子を使って上部に出て、樹林帯の中に行く。分水嶺の県境に 11 時前に着き、北側に 10 分ほど行くと関山（大峠）。樹林帯で見晴らしがないので記念写真を撮って下山。途中の広めのスペースがあるところで昼食をとる。

山形側に入ってから泉ヶ岳や月山方面を望見できた。下山コースは、なだらかで歩きやすい。宮城県入り口と山形側下山口に渡渉があったが、水量は少なく石伝いに渡れた。



石碑前にて

全体を通してコースは歩きやすく、国道が開通するまで頻繁に使われていたと思わせる山道だった。

（３）夏山山行（翁山）

実施日 令和 3 年 8 月 7 日

山 域 翁山（翁峠）1075m

参加者 会員＝太田正、千石信夫、横山哲、加藤知宏、富塚和衛、富塚真味子、

鳥田笑美 支部友＝津久井宏、村上敏郎、鳥田伊志 計 10 名

報告者 太田正

翁山は宮城・山形県境の山で、山形県側では「翁山」、宮城県側では「翁峠」と呼んでいたが、調べてみると国土地理院は 2012 年 11 月 12 日に山名を「翁山」と変更したそうです。宮城県に住んで居るものとしては、昔から慣れ親しんでいた山名が変わったことは大変残念な気がします。

行程は仙台からハリマ小屋登山口まで約 3 時間位と思っていたが、少し早く到着する。準備をして 9 時 15 分スタート。10 時 40 分には山頂直下、祠のある場所に着き、朝早いことから昼食をとる。

ゆっくり休憩して 11 時 30 分出発、山頂を経て途中の稜線歩きは快適で、登山道の脇には山百合のオンパレード（前週あたりが最盛期）。花を楽しみながら鞍部まで下り、吹越山ハリマ小屋分岐から急坂を下山。不老長寿の泉でブナ林から流れ出る冷たい湧水で顔を洗ったりしながら休憩し、ハリマ小屋到着は 13 時 10 分だった。

この山は、会員であった宮崎の故後藤邦慶さんから 40 年程前に、“太田さん、翁峠を案内するから是非いらっしゃい”と声を掛けてもらい、気になっていたが行く機会がなかったことを思い出し、数年前に宮城側から登りました。しかし、林道は通行止めになっているほか、道路状態は悪く、小型四駆以外の車では走行不能だった。その後、このコースを登山した際、不老長寿の泉は、もっと水量があったような気がしていたが、少ないのに驚きました。人間の記憶な



翁山山頂にて

ど当てにならないものです（私だけかも）。

宮城側からの登山者は前述通りの状況で少ないと思われます。山形側からは逆に多いようで、低山（1075 m）で盛夏にもかかわらず今回も何組かのグループと会いました。我々もゆっくり歩いて休憩も含めて 4 時

間弱の時間で、里山を少し延長したような手軽に楽しめる感じです。季節を変

えて、また登ってみたい山でした。

（４）秋山山行（糸岳）

実施日 令和３年 10 月 17 日（日）

山 名 糸岳（1227.7m）

コース 秋保ビジターセンター～糸岳登山口～二口峠～糸岳～二口峠～山形ゲート～御境目番所跡入口～古道探索～翠雲荘（昼食）～古道探索～林道～番所跡入口～秋保ビジターセンター解散

参加者 会員＝千石信夫、富塚和衛、草野洋一、横山哲、千葉正道、加藤知宏、高橋二義、（ゲスト）阿部孝祐 計 8 名

報告者 千石信夫

新型コロナ感染対策である国の「緊急事態宣言」と、宮城県に於ける「まん延防止等重点措置」の解除を受け、我が支部も山行を解禁とし、秋山山行を山岳古道の調査対象山域でもある糸岳を選定し実施することとした。

当日の天候予報では寒冷前線が東北地方を通過することで、雨の予報であるものの、その後は冬型の気圧配置で気温は冷えるが、回復傾向であったので決行の判断とした。最近雨の中を歩くことも少なくなり、時々雨も体感しておくのも悪くないという気持もあった。

秋保ビジターセンターの駐車場に参加者 8 名が集合した。私から今日の糸岳のルートについて説明、登山口から入ったところで渡渉箇所があるので、水嵩が多ければ無理をせず、二口峠から糸岳を目指すことにする旨をお話した。糸岳登頂後の予定は、二口御境目番所跡を見学する予定とした。

車を整理し高橋二義車と千石車の 2 台で林道を入り、糸岳の登山口である白糸の滝入口に車を止め渡渉地点まで向かう。昨日からの雨もあり水量も多く、二口峠から糸岳に向かうことに変更する。再び車で峠まで移動する。

峠からは分水嶺のルートでもある稜線上を北上し、笹藪のなか登山を開始した。雨はさほど強くないが、風は強くなってきている。しばらく歩くとブナ林の中を歩くが、霧の中の鬱蒼とした景観が美しく見えた。紅葉は一部黄色の葉が見える程度でまだ青い。途中ナナカマドの実が鮮やかに光っているのが印象

的であった。

まもなく糸岳山頂到着。小休止後、記念撮影し下山する。途中、後から登ってきた高橋二義さん、横山哲さんと合流し一緒に下山する。峠では、山寺に降りるルートが藪に包まれているのを確認。その後は林道を山形ゲートまで移動し、仙台神室方面の山々を眺めた。御境目番所跡へ向かい、高橋二義さんに二口古道についてのガイドをお願いした。高橋さんは、二口古道について以前より研究されており、3年前ごろか



糸岳登山道にて

らは現地古道調査もされている。二口の名前の語源である石碑を確認し、その分かれ道から清水峠までの古道を暫し歩くことができた。今は全く歩かれていない道ではあるが、はっきりと古い道の形が確認できるところが分かった。お昼となり翠雲荘にて昼食をとる。この小屋とその周辺の土地は山形市の管理、宮城県側にある土地であるが所有は山形市。高橋さんは“悔しいね、仙台市に買い取ってほしいものだ”と、何度も口にしている。もともとは仙台領であるが、本当に悔しい想いは私も同感であった。

昼食後は、番所跡から野尻方面への古道を300メートルほど下った。この部分は、沢を越えるのに橋があった跡と見られる石積みなどが確認できる。また、林道造成の工事により古道が埋められた部分などがあり、歩きにくい部分もあった。林道を番所入口まで戻って古道探索を終了する。ビジターセンターまで戻り、次回の支部山行は栗駒古道を踏査したい旨、冨塚さんよりお知らせがあった。そのあと解散とした。今回は加藤知宏会員のお誘いで阿部孝祐さんがゲスト参加された。若い人が参加されることは嬉しいことでした。

（５）晩秋山行（栗駒山麓）

実施日 令和3年11月13日（土）

山 域 栗駒山麓：栗駒古道（標高約900m）

コース 世界谷地駐車場～大地森御前～巨木の森入口～木柵の大クロベ～（昼食）～往路を返し～世界谷地駐車場～解散

参加者 会員＝富塚和衛（リーダー）、千石信夫、富塚真味子、横山哲、加藤知宏、鳥田笑美、支部友＝鳥田伊志、針生紀子、村上敏郎、多田孝徳、佐藤富士子、ゲスト＝阿部孝祐 計 12 名

報告者 富塚和衛

県内のコロナ感染者も少数で推移するようになったことから、10 月に活動自粛を解除し月例山行を再開した。引く続き 11 月の月例山行も栗駒山麓「歴史と巨木の森：栗駒古道」で実施することとした。

山頂に雪を頂く栗駒山（1627m）を仰ぎ見ながら、山麓の集合場所に向かう。行く手には虹がかかり、天候が懸念された。8 時 50 分には参加者全員が世界谷地駐車場に集合。それに地元に住む旧知の山岳ガイド（公益社団法人日本山岳ガイド協会会員）狩野浩氏を加えた 13 名の山行だ。挨拶後、狩野氏を先頭に栗駒古道に歩みを進める事に。

栗駒古道（栗駒越え）は中世、奥州から奥羽山脈を越えて羽州仙北地方に通じる道の一つとして開削されている。江戸時代になると「栗駒越え仙北道」は「上羽道」と呼ばれ、一里塚とお助け小屋（山小屋）を完備し、安全と便利さにより山越え街道中、一番の交通量を誇った。明治になると、県道「羽後岐街道」として認定を受けたが、和賀越え道が拡幅され、荷馬車が通れるようになってからは羽後岐街道の交通量は激減し、廃れていった。栗駒古道はその名残である。

栗駒古道入口に設置されている案内板を前に、狩野ガイドからルートの説明を受ける。時刻は 9 時、葉を落した広葉樹の森に伸びる緩やかな勾配の古道を行く。20 分程で^{まぐさもり}林森お助け小屋跡地に着く。1 本の杉の木が跡地の目印だそう。そこから 30 分程登って行くと「聖石」がある。高僧が腰を下ろして一服したところなのだろう。

この辺りは「ブナの森」と称される処だ。途中、下って来る背負子の初老に逢う。中を覗かせてもらおうと、背負子にはキノコがぎっしり。狩野ガイドによれば、今は、むき茸、ナメコのシーズンだと言う。我々も“キノコ目”で先へ

と進む。出発してから 1 時間ほどで木製のテーブルとベンチが設えてある大地森御前に着いた。ここで大休止。ここは変則的な十字路になっており、^{いにしえ}古には交通の要衝と推察される。お助け小屋、鳥居跡、一里塚、^{えんのぎょうじや}役行者像があったと言う。

大地森御前から古道の上羽道を登り詰めて行く。カラマツ林を過ぎ、一旦、大地沢まで下る。そこから、急登を登り返す。途中、ブナの根元に鎮座する小さな^{まさかり}鉞山神の石像がある。そこから巨木の森入口までは直ぐだ。時刻は 11 時 40 分。ここで栗駒古道と別れて木桧平をクロベ巨木の森へと入る。その一角に、日本一と称される幹回り約 10 メートルの木桧の大クロベが枝を広げていた。



大クロベの前にて

クロベ（黒檜、地方名：ネズコ）は日本固有種で、石の多い急斜面に自生し、この辺りには幹回り 5 メートル以上のクロベが点在する。栗駒山麓には他にも日本最大級の山桜やミズナラが自生していると言う。

大クロベの前で集合写真を撮り後にする。木桧沢に架かる橋の上で各自昼食を摂る。空模様が怪しくなる中を栗駒古道に戻り、登って来た道を世界谷地の駐車場へと引き返した。駐車場に着いたのは 15 時を過ぎていた。愚図ついた天候ではあったが、古の雰囲気漂う古道歩きはキノコ狩りも楽しめ、参加者には満足して貰えたのではないかと思う。最後に、案内をお引き受けいただいた狩野ガイドに拍手で感謝の意を表し解散した。

（６）初冬山行（関山街道）

実施日 令和 3 年 12 月 5 日（日）

山 域 関山街道（宮城県と山形県の県境）

コース 国道 48 号線宮城県側街道入口（坂下境目御番所跡）駐車場～旧国道交差部～県境尾根～（昼食）～関山ピーク（大峠 812m）～山形県側下山口・林

道～事前にデポした車に乗り、宮城県側入口駐車場に移動～現地解散

参加者 会員＝千石信夫、富塚和衛、遠藤幸壽、佐藤昭次郎、千葉正道、加藤知宏、支部友＝津久井宏 計 7 名

報告者 加藤知宏

2021 年は 2020 年に引き続きコロナ禍のため山行を自粛する期間があったが、感染者数が落ち着いた 12 月の月例山行は関山街道にて無事行うことができた。

当日は、国道 48 号線宮城県側入口の駐車場に集合した時点で積雪があった。千石支部長の車 1 台を山形県側の下山口にデポ。宮城県側街道入口には、「坂下境目御番所跡」の標柱と並んで「関山新道開削受難の碑」が立っていた。



関山峠ピークにて

広瀬川源流を渡渉後、急登を上り始める。旧国道と「嶺渡り」の交差部に出て 100m 西進すると、アルミ梯子があり、それを使って上部に出て、ロープに頼って急坂を登る。途中、雪上に残った熊の足跡を何度となく確認する。分水嶺の県境尾根に午前 11 時 30 分頃に着き、そこで昼食を摂る。

そこから北側に 10 分ほど登ると、関山峠ピークに到着。山頂には「大峠」という標識がある。ここでメンバー全員で記念撮影をする。その後、山形県側下山を開始した。下山コースはなだらかで歩きやすい。午後 2 時 15 分に山形県側下山口の駐車場に到着、デポした車に乗り、午後 2 時 30 分に宮城県側街道入口駐車場に移動、解散した。メンバー皆元気な様子だった。

今回山行の総括として、熊の足跡を何度となく確認し、幸いにも遭遇しなかったが、山行中に遭遇しないよう、常に周囲に気を配るとともに、同時に熊鈴やラジオを使用するなど、大きな音を立てながら人間の存在をアピールすることが重要だと思った。

また、関山街道は明治 15（1882）年に関山隧道（旧国道）が開通するまで、宮城県と山形県の往来に使われていた古道で、当時は頻繁に使われていたこと

から、当時の人々の脚力には吃驚^{びっくり}する。

最後に、今回は雪の中を歩いたので、季節を変えて、木々の緑や道端に咲く花々を見ながらまた登ってみたいと思います。

《付記》

令和3年4月18日の春山山行、9月19日の初秋山行、令和4年2月20日の厳冬期山行は、何れもコロナ感染拡大で中止。また令和4年3月27日に予定した早春山行は、3月16日に起きた福島県沖地震の影響で中止した。

【公益事業山行】

新型コロナ感染者の高止まりで、合宿形式で行う積雪期登山技術講習会（5月）は中止とし、また登山に関心のある親子を対象にした「親子登山教室事業」並びに一般県民を対象にした「登山教室事業」も全て中止した。但し、日程を有効活用するため共益事業の各種山行に振り替えて実施した。

○令和3年5月1日～3日 積雪期登山技術講習会（蔵王）・・・中止

○令和3年5月23日 第10回親子登山教室・・・中止

○令和3年7月17日 第9回登山教室→初夏山行に振り替え

○令和3年10月17日 第11回親子登山教室→秋山山行に振り替え

○令和3年11月13日 第10回登山教室→晩秋山行に振り替え

また、仙台市内の小学校5年生対象の「泉ヶ岳登山」を支援する事業は、要請に応じて教育委員会、学校側と連携を図り、下記の6校に対し支援ボランティアとして延べ10名が参加した。新型コロナの影響で登山を自粛する小学校が多くあり、支援は例年より少なかった。

○令和3年5月31日 仙台市立愛子小学校 ○6月8日 仙台市立加茂小学校

○6月14日 仙台市立岩切小学校 ○6月19日 仙台市立鶴が丘小学校

○10月6日 仙台市立鶴が丘小学校 ○11月9日 仙台市立南小泉小学校

2021 年度 山行事業以外の宮城支部活動記録

○全国山岳古道調査

日本山岳会創立 120 周年記念事業「全国山岳古道調査」のため、特別委員会を立ち上げ、次年度からの調査体制を整え、活動方針などの検討に入った。令和 3 年 11 月 4 日（木）に第 1 回の全国山岳古道調査特別委員会を開催、下記の委員が選ばれた。

委員長：富塚和衛、委員：千石信夫、千葉正道、佐藤昭次郎、遠藤幸壽、太田正、加藤知宏、鳥山文蔵、アドバイザー：柴崎徹、高橋二義

調査対象の古道は「栗駒古道」、「二口街道」、「蔵王古道」、「関山街道」の 4 ヶ所を選定、その後、本部より「出羽・仙台街道」が追加され、5 ヶ所となる。各古道調査の担当者及び役割等を決め、次年度の雪解けを待って調査活動に入ることにした。

下記に予定していた親睦事業は、コロナ感染防止の観点から自粛した。

○令和 3 年 8 月 1 日 令和 3 年度宮城支部ビールパーティー

○令和 3 年 12 月 12 日 令和 3 年度宮城支部年次晚餐会

2021 年度 宮城支部以外の行事参加記録

（１）令和 3 年度 第 1 回支部連絡会議報告

令和 3 年 4 月 10 日 オンライン開催

古野会長の挨拶のあと会務報告に移り、令和 3 年度事業計画、年度予算などの説明。また記念事業委員会と指導者養成講習会から報告があった。このあと意見交換が行われた。尚、同日「第 1 回全国山岳古道会議」がオンラインで開かれ、本部から進捗状況と今後のスケジュールなどが報告された。

（２）令和 3 年度 第 2 回支部連絡会議報告

令和 3 年 9 月 25 日 オンライン開催

会長挨拶のあと支部活動事例で、群馬支部から会員増加の具体例、その一方、越後支部からは会員減少の現状が報告された。また 120 周年記念事業の古道調査について、本部プロジェクト・チームの進捗状況と今後活動の説明があった。最後に橋本副会長から新型コロナウイルス感染拡大のなか、登山者が留意すべきことの説明と注意があった。

(3) 令和 3 年度 第 3 回支部連絡会議報告

令和 4 年 1 月 20 日 オンライン開催

5 年後に支部はどういう姿にしたいか、安全登山に取り組むことは何かなど、「支部の 5 年後」アンケートの集計結果が報告され、支部で出来る事や周辺支部と一緒に出来る事、また本部に支援してもらいたい事などについて報告があった。そのあと古道調査ワーキング・グループからは、120 選は現在選定作業中で 2 月中に決定予定などの連絡があった。宮城支部関係では「出羽・仙台街道（奥の細道、尿前の関～封人の家～刀山峠）が追加された。

《付記》

全国支部懇談会、東北・北海道地区集会、宮城・山形支部交流会、本部晩餐会は何れもコロナ感染防止のため自粛、中止となった。

太白山の登山道

高橋二義（7885）

6月になると木々の緑も一段と濃くなり、自然の元気さを強く感じる季節になります。今回は、ごく最近、太白山の山中一帯、多くの登山コースが歩き登られている事を記すことにいたします。太白山の名称等についての紹介は、当会の重鎮・柴崎氏発行の『宮城の名山』に委ねることに致します。

今の太白山は3月の地震で山頂鳥居手前の登路が長さ約40㍍ほど、幅5㍍から10㍍位の地割れが生じ、割れの東側が5㍍から15㍍位下がりました。神社からのコースが神楽堂の前で虎ロープが張られて、「地震でコースの一部が危険状態になったので入山しないように」との表示が、地震後3週間ほど過ぎてから出されました。

しかし今、山頂に達するコースは、最も古いこのコースを入れて4ルートが登られております。依って他のコースから登頂して、ここを下る人が多いので、この入山制止警告はあまり意味をもたないのです。

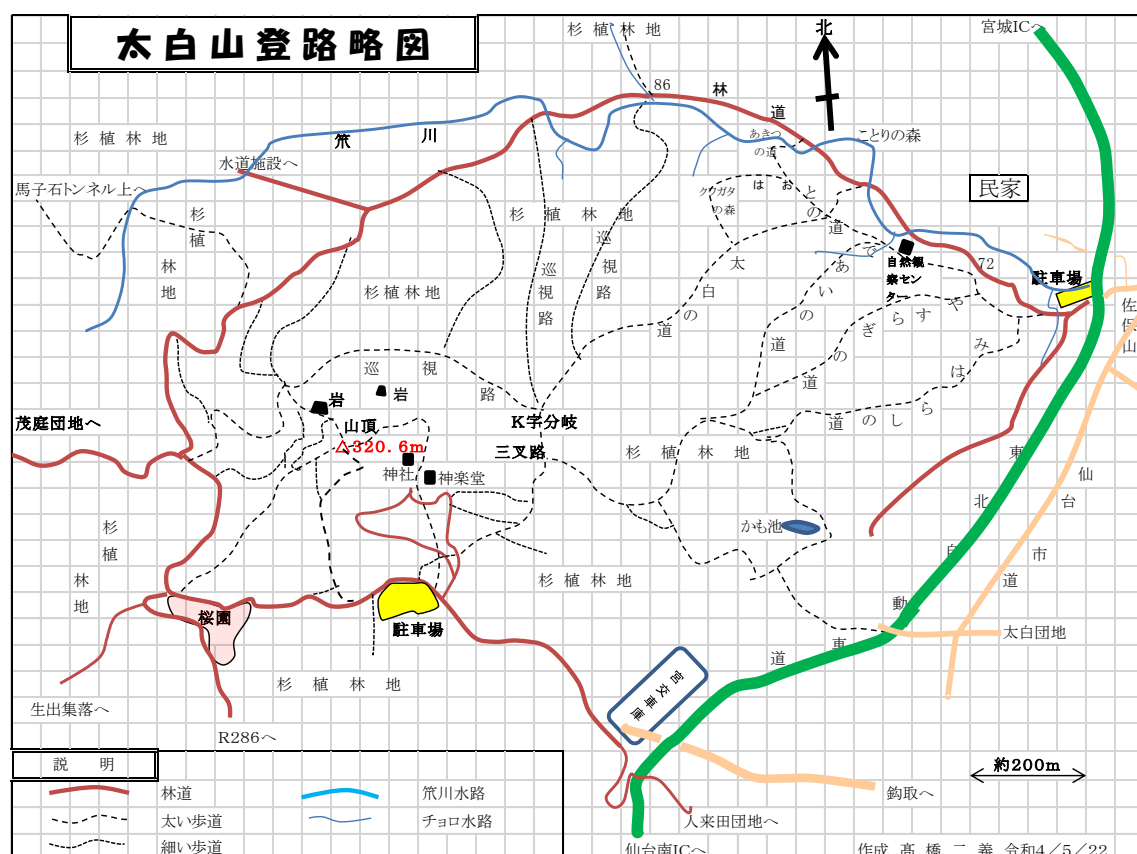
最も短いコースは神社下の駐車場北西側から取り付き、急登を一気に登り山頂の南東側に登り上げるルートで、早い方で20分から30分で登り上げるのです。他の3つのコースに比して、登り下りに頼りにされて掴まるための虎ロープが何処にも張ってありませんし、山頂直下では一部40度前後の急傾斜部分があります。両手を立ち木や岩に支点を求めて登る必要があるコースになっており、体力とバランスが求められます。地震直後には、多くの落石が立ち木に衝突したと思われる真新しい、痛々しい傷が多くみられました。又、下が湿っている時には滑り易いので十分な注意が必要です。

一番長いコースは、佐保山の東北自動車道路下の駐車場から「太白山自然観察の森」を経て登るコースでしょう。観察の森から何本かあるコースのうち、最も北側の太白山直道を進むと、やがて神社東側から神社下を抜けて山頂に達する従来のコースに出ます。このコースには途中、右に分岐するコースが3ヶ所、山裾を右カーブになる所で東方の観察の森コースから交わる三差路になる

所があり、これを過ぎると間もなく更に2つの右分岐があります。どちらを右に入っても、神社下に出るので迷う必要はありません。

他に、神社下の駐車場から車道を西に進むと、左が開けて桜の植えてある所に出ます。ここの西端で車道が二分する所の山側に登り口があります。ここから入るコースは杉の植林地内を緩やかに登り、斜度が増してきたと感じるようになる頃から虎ロープが張られ、山頂直下までしっかり誘導してくれます。山頂貴船神社の裏側に登り上げ、三角点から見ると南西側になるコースです。

山頂へのもう一つは、三角点から見て北側に出てくるコースです。これは前記した観察の森からのコースで、3つ目の分岐から右に入りますが、この分岐に到達するに、もう一つのルートがあります。観察の森管理棟脇の車道を茂庭団地方向に進み、脇を流れている笹川の橋を4つ渡って左に入り口があります。植林地の順視路と思われる路は緩やかな登りで、この分岐に出ます。この分岐



はK字型の交わりに成っています。車道から直接来た時も、観察の森から来た時も右に曲がります。しばらく植林地内の順視路を進むと、左から降りてくる

コースと交差する場所に出ます。小さな尾根になっており、杉の植林が檜、小檜の自然林に変わるところです。このまま直進すると緩やかに下り、茂庭団地から入ってくる車道が、太白山の北を廻る道と南を廻る分岐点の十数^{じゅうすう}南側の路を入った所に出ます。

前記の交差点を左に入ると、やがて斜度が増し、そのまま進むと左手に2つの^{こぶ}瘤の大岩があります。これを過ぎると更に斜度がきつくなり、虎ロープも現れて間もなく三角点北側に出るのです。

これら4コースは、何れも緑豊かな樹林の中を移動するので展望は良くありません。山頂は東側の展望が確保されており、また南側は大震災の時に一部崩れたので見えるようになりましたが、生き帰って来た樹林にやがて閉ざされるかと思います。北側からは泉ヶ岳方面や七つ森等が良く見えます。

この山頂は特に正月初日が一杯になるくらい、近隣の方々が初日の出を見るために登頂して、日の出待ちをしているのに驚きます。

記したコースは何れも斜面が急になって、間もなく付近でそれぞれ踏み跡程度ですが、連絡通路も歩かれています。色々とコースを組み立てて楽しむ事も出来、足慣らしに最適な場所ともいえると思います。

前記した『宮城の名山』に、「太白山は仙台のシンボルである」と明記してあります。市民に愛される、かわいい“おむすび山”を大いに登って戴きたいと思っています。

(令和4年6月25日 記)

尚、高橋会員より「二口谷の詩」が寄せられました。現在、古道調査で二口街道（二口峠・秋保街道）が対象の一つとなっておりますのでご紹介します。

『二口谷の詩』

高橋二義

1 秋係の西に ばんじ岩

これを従え オビスを^{まど}装い

独立峰が 鎮座する

二口主峰の ^{おおあずま}大東岳

2 春は若葉で 夏深緑

秋の錦は 黄金色

中で際立つ ばんじ岩

冬は雪載せ 岩ヒバ寝むる

3 表ばんじを 東西二分

水の力を 示してる

高い岩壁 削りぬき

流れる水は ばんじ沢

4 続く太古の 昔から

水の浸食 岩ひだ造り

降る雨強いと このひだに

同時多条の 滝 見事

5 ばんじの岩の 仲間には

表ばんじ に 裏ばんじ

日陰ばんじ と その裏に

太郎ばんじ の 岩壁続く

6 南にとんがり 仙合神室

北にぞびえる おおあずま 大東岳

中を流るる 二口谷に

風の洞なる 難所あり

7 いま 現在は橋掛け 一息で

渡り進めば ばんじあと 御番所跡

登りつめたる 二口峠

むかし やまぶしどうげ 山伏峠なり

8 杉の林中 御番所西

追分石の 表には

右に山寺 左にかうやゑ

二口の 語源ここにあり

穴毛谷 3 月 2 日の記憶

千石信夫

笠ヶ岳の東面にある峡谷「穴毛谷」。この穴毛谷には、今でも鮮明に記憶していることがある。大学の山岳部に入って一年が過ぎようとしていたころである。

毎年度、その年の目標の山を決め、その山城を集中して偵察、踏査を行い、総決算として位置づけるのが春山合宿だった。当時は、今の高所登山と違って、海外を夢見てヒマラヤなどを想定し、極地法が主流とした時代である。1969 年 2 月の春山合宿で新穂高温泉の槍見にベースキャンプを設け、大木場の辻を経由して錫杖岳から稜線を辿り、笠ヶ岳の登頂を目指した。

私は、ボッカ要員で毎日毎日 B C から C 1 への荷揚げ、C 1 から C 2 へのルート工作など、そしてまた荷揚げと、行ったり来たりしていた。これを計画することも訓練ではあるが複雑で、食糧、燃料、装備、メンバーの配置など綿密な計画が求められる。時々食糧が不足したり燃料が少なかったりして、怖い先輩から叱られることがよくあることだった。

ベースキャンプから深雪の中、ルート工作、前進キャンプ設営、そして荷揚げは順調に進み、A Cまで前進し第1次アタック隊は無事登頂した。1次アタック隊はC 2に降り、代わりに2次アタック隊がA Cに入る。1年生の私でも第2次アタック隊に選ばれ、先輩2人と私の3人で笠ヶ岳山頂を目指すことになった。

その日は3月2日、高曇り、風も弱く、快適に登頂できそうだった。早朝、A Cからワカンを履き出発、クリヤの頭あたりで稜線の雪もクラストしてきたのでアイゼンに履き替えてから小休止し、そしてまた山頂へと進んだ。視界もよく、遠くに笠ヶ岳への稜線が薄っすらとではあったが眺められる。山頂まで問題なく進めるだろうと思いながら歩いていた。その時、突然、私の後を歩いていたリーダーの先輩が、稜線の雪庇を踏み外して穴毛谷の二ノ沢に転落したのである。先に歩いている我々のトレースから少し逸れて歩き、小さな雪庇に気づかなかったのだ。わずか60センチぐらいの雪庇だった。一瞬の出来事で私は、先輩の名前を何度も叫ぶことしかできなかった。あの急峻な沢を稜線から覗くと、かすかに雪の塊が落ちるような音が聞こえた。そして何事もなかったように静寂に包まれた冬の山の自然に戻るのだった。

私にとって、これが自然の厳しさ、理なのかと痛切に感じる初めてのことであった。私の面前での転落、先輩とはその時、目と目が合い、それが最後となってしまった。その後、何度も二ノ沢に入り捜索が行われ、発見したのは5月になった。新緑の中、まぶしい光があふれる季節に、上宝村で茶毘に付された。未だに3月2日は私にとって、特別な記憶の穴毛谷なのである。穴毛谷二ノ沢出合い辺りを再び訪ねたいと思っている。

思いでの山「北岳」

富塚和衛

日本で一番高い山は富士山であることは誰でも知っている。それでは2番目の高峰はと聞けば、知っている人は少ない。北岳だと教えられて、どこにある山か予想もつかない。2008年9月の下旬に、そんな山の山行を楽しんだ。これは、その時の山行記録である――。

日本第2位の高峰、北岳は南アルプスの主峰として君臨する。この地には鳳凰山地（地藏ヶ岳 2764m、観音岳 2840m、薬師岳 2780m）、白根山地（北岳 3193m、間ノ岳 3190m、農鳥岳 3026m）、赤石山地（東岳・別名悪澤岳 3141m、荒川岳 3083m、赤石岳 3120m）の3山地からなる。静岡県、山梨県、長野県の県境に位置し、南アルプスと称されている。

北岳へは芦安温泉の白雲荘に前泊し目指すことにした。先ず、芦安温泉から南アルプス林道を広河原まで行かなければならない。この間はマイカーが規制されており、バスか乗り合いタクシーの利用となる。我々はバスを利用することにした。始発は6時、これに間に合うように宿を出る。生憎、小雨が降り続けている。バスには先客がいた。山を目指す者は気が早いようだ。夜叉神峠のトンネルを抜け、約1時間の行程で広河原に到着する。甲斐駒ヶ岳や仙丈岳へは、ここで北沢峠行きのバスに乗り換える。バスから降りると風雨の洗礼、先



▲間ノ岳から望む北岳

が思いやられる。

広河原から野呂川に架かる吊り橋を渡って登山道に入る。橋を渡って直ぐ右手に「広河原山荘」がある。雨が降り続けている。白雲荘で用意してもらったお握りを頬張り、暫く様子を見る。意を決して入山届を出して山荘を後に

する。樹林帯で白根御池方面への道を右手に見送り、大樺沢左岸を進む。途中、崩落地を避けて右岸に渡り、再び左岸に戻る。そこからは大樺沢二股まで緩やかな道が続く。大樺沢二股が近づくにつれて北岳が覆いかぶさるような姿を見せる。特に大樺沢二股は水場もあり絶好の休憩地だ。バイオトイレも設置されている。

大樺沢二股でコースは3つに分かれる。雪渓が残る左手に直進すれば八本歯のコル、少し戻るように道を取ると白根御池小屋方面へ、北岳肩ノ小屋へは真ん中の道を右股に沿って進む。登り始めると直ぐに沢から離れ、灌木の中をジグザグに登りながら高度を稼ぐ。風、雨が止まない。灌木帯を抜け、傾斜が緩

くなると白根御池小屋からのコースに合流する。暫く高度を稼ぐと、小太郎尾根分岐へと出る。この辺からはハイ松帯に変わり、風を遮るものもない。肩ノ小屋までは稜線を進む。寒冷前線が通過中なのか強風が吹き荒れ、雨も叩きつけるように顔を打つ。慎重に一步一步進む。それでも強風で身体が飛ばされそうになる。岩にしがみ付きながら、やっとの思いで肩ノ小屋へと辿り着いた。約 6 時間の行程となった。

小屋の中には風雨を避け多くの登山者がいた。ストーブが焚かれ、その周りで談笑している。直ぐに着替えをして、その輪に加わった。話を聞くと、悪天候のため北岳に登れず、足止めされている人も多くいた。お酒で暖を取っているうちに空模様が回復してきた。相変わらず風は強い。山小屋の主人の話では外気温が 8℃ から 4℃ に低下したとのこと。寒冷前線が抜けたのだろう。下界では 30℃ 程度の気温が観測されているのに、山の上は一桁の温度とは。やはり山は侮ってはいけないということを教えてくれている。

夕方近くには晴れ間が覗き、夕焼け空の下に北岳の山頂も顔を見せてくれた。カメラにその風景を収め、夕食を戴き就寝した。

山行 2 日目は、肩ノ小屋～北岳山頂～間ノ岳～北岳山荘と歩く予定だ。夜明け前に目を覚ます。天候が気になる。夜来からの風の音が止まない。外に出て天を仰ぐと、雲は切れて雲海が形成されていた。空気は肌を刺すような冷たさである。外に置いたバケツの水が凍り付いていた。朝日が昇るのを震えながら待つ。南の方向にはクッキリと富士山が裾野を広げている。

6 時過ぎに北岳山頂目指して肩ノ小屋を出発。小屋から北岳山頂までは約 180 ㍎の標高差となる。朝日を背にして露岩帯の急坂を進む。振り返ると青い屋根をした肩ノ小屋が見える。両俣小屋方面への分岐まで来ると、傾斜が緩やかになる。岩稜をさらに進むと北岳山頂に着く。1 時間もかからない。

北岳山頂からは、南アルプスの盟主に相応しい大パノラマが堪能できた。南に雲海に頭を出す富士山。時計回りに西に眼を転ずれば、驚くほど膨大な山容を悠然と構える間ノ岳。その向こうに農鳥岳が、北には花崗岩が目立つピラミッド型の頂上をした仙丈岳、そして甲斐駒ヶ岳が。東には稜線が白い砂で覆われた鳳凰三山が、南アルプスの壮大なスケールを教えてくれる。

正面に間ノ岳を望みつつ、露岩や岩屑の道を下っていく。池山吊り尾根の分岐を右に見送り、さらに下る。主稜線を進みハイ松帯まで下れば、赤い屋根の北岳山荘はそう遠くはない。山荘のベンチで一休み。一息入れたところで間ノ岳へと向かう。間ノ岳は白峰三山の中央に構え、北岳より山容は大きく堂々とした山である。標高も奥穂高岳に続き、国内第4位（現在は第3位）の高峰である。

北岳山荘からは、左前方に富士山を眺めながらの稜線歩きとなる。間ノ岳への間には中白根山（3055m）があり、このピークを越えていく。ここからは岩尾根の先に間ノ岳が見える。小さな岩峰を越えて行くと、岩礫地の広々とした間ノ岳の山頂に辿り着く。標高3000mを超える稜線歩きは、日本ではここだけだ。じっくり味わいながら歩を進めた。山頂からは富士山、塩見岳、農鳥岳を眺望できる。振り返ると北岳は鋭さを増し、天辺が丸くなった円錐状の尖端を空に突き上げている。暫く、周囲の山々のスケッチに時間を費やし、来た道を引き返した。

山行3日目は北岳山荘から広河原、そして芦安温泉へと下山予定だ。日の出とともに岐路につく。北岳山荘からの岐路は2コースある。一つは、北岳頂上を目指し池山吊り尾根分岐まで登り、右に折れて八本歯のコルへと向かうコース。もう一つは、稜線をトラバースし、途中で合流するコースとがある。

風が強い事もあり、北岳山頂を目指すコースで下山した。北岳山荘方面への分岐を見送り、巨岩が堆積した尾根を下る。木製の梯子を伝って下って行くと、八本歯のコルに至る。この名称の由来となったと思わせる形をした奇岩が続く。八本歯のコルから、道標に従って大樺沢二股へと向かう。梯子が次々と現れる。今まさに修復工事中で、真新しい梯子に足を乗せることになった。梯子場が終わると雪溪が現れる。雪溪の左側を下っていく。雪溪には落石が至る所で見られ注意が必要だ。北岳バットレスから流れ出る清流を横切り、大樺沢左俣を下る。二股に着いたら、後は登って来たコースを下るだけだ。約4時間半で広河原に着いた。其処からは乗り合いタクシーで芦安温泉へと向かった。山の天候の気まぐれさを知った山旅でもあった。

浅間隠山と鼻曲山

千葉正道

鼻曲山という山を知ったのは、先年亡くなったドイツ文学者の池内紀さんのエッセイを読んだ時でした。霧積温泉に 1 泊し、登山をしたという話である。霧積温泉は、森村誠一さんの「人間の証明」の舞台に登場する場所でもある。山の地図をみると、その北の方に 200 名山の浅間隠山が位置していた。その山麓には浅間隠温泉郷があり、両方をつなげば、ややハードではあるが 1 日で縦走可能と考えられた。今年は梅雨明けも早く天気予報も安定していたので、週末の 3 日間の予定で決行した。

仙台から高崎まで新幹線を利用し、吾妻線に乗り換えて群馬原町駅で下車。そこは真田の里で、近くには岩櫃城址がある。上州側（群馬）からの浅間山の展望を隠しているので、浅間隠山と名付けられたようだ。路線バス、オンデマンド・バスを乗り継いで、鳩の湯温泉三鳩楼に到着。本日の客は私だけという。ひなびた風情のいい温泉宿でした。

翌朝、宿の軽トラックで登山口まで送ってもらった。8 時に登山口を出発し、シャクナゲ尾根を登り、10 時 30 分に浅間隠山 1757 ㍎に到着。3 組のグループがいましたが、何れもこれから向かう二度上峠からの登山客でした。山頂からは浅間山の雄姿が望まれた。一度下り、高崎と軽井沢を結ぶ車道に出て、駐車場を通過し二度上峠着。ここから鼻曲山登山が始まる。先ず小ピークの氷妻山を過ぎ鼻曲山が遠望される。山頂近くが鼻のように飛び出していた。風はなく蒸し暑いなか急坂を登り、14 時 50 分鼻曲山 1655 ㍎到着。山頂は西のピーク小天狗と東のピーク大天狗に分かれている。下ると鼻曲峠で旧碓氷峠方面への道を分け、天狗坂と呼ばれる細い急坂はアップダウンを繰り返す。一部登山道が崩壊しているところがあり慎重に進む。次第に高度を下げ、水車がある霧積温泉金湯館に到着したのは 17 時だった。谷間の 1 軒宿であるが、往時は多くの文人や要人が投宿したらしい。帳場には古い色紙や写真が飾られていた。

翌朝は宿の送迎バスで横川駅までであるが、途中の通称めがね橋（碓氷第 3 橋梁）で降ろしてもらう。めがね橋の上から、“碓氷峠アプトの道・遊歩道”が中山道の碓氷関所跡を結んでいる。右上方にときどき妙義山を見ながら、約 1

時間半の行程を歩き、横川駅に到着した。天気にも恵まれ充実した山旅となった。横川駅で“峠の釜飯”を購入し、帰路についた。(2022. 7)

真昼岳登山を振り返って

加藤知宏

令和4年5月21日(土)、実家への帰省も兼ねて、秋田県仙北郡美郷町と岩手県和賀郡西和賀町との県境にある真昼岳に日帰りで登山した。

今回の山行は、モンベル秋田美郷店が主催するアウトドア・イベントで、真昼岳に登るのは初めてだった。秋田出身ながら真昼岳の存在を知ったのも、このイベントを通してであった。

簡単に真昼岳の紹介をすると、秋田県の穀倉地帯「仙北平野」の東に連なる真昼山地の中で、ひととき高い山で標高1059mである。山容は丸味をおびて穏やかだが、沢は深く滝が多いことで知られる。

また、岩手県和賀郡西和賀町と境をなし、真木真昼県立自然公園内に位置する。征夷のために北上した坂上田村麻呂が、山頂で真昼を迎えたからとか。また「真蒜」「馬蛭」とも書くことから、「蒜」や「蛭」がマヒルの語源になったからともいわれる。古くから信仰の対象とされ、山麓の一丈木(いちじょうぎ)公園に一ノ鳥居、登山口の赤倉には中ノ鳥居、山頂には大国主命を祀る三輪神社奥ノ宮がある。

登山コースは3本あり、赤倉コースが変化に富み楽しめる。山頂まで2時間強。ほかに峰越口からのコース(約1時間30分)と、善知鳥(うとう)口からのコース(約3時間)がある。

今回の山行は、赤倉コースを往復するものだった。午前8時に赤倉登山口手前にある鳥居前に集合。他の参加者は美郷町、仙台、岩手などから来ていた。鳥居を潜って20分ほど林道を歩き、登山口に着く。そこから登山道を登っていくのだが、周囲はブナの原生林が生い茂り、ユキザサやミヤネアオイなどの花も所々に咲いていた。途中、残雪がある箇所もあって、大分溶けており、アイゼンを装着せずとも歩行に支障は無かった。また、稜線沿いの見晴らしがきく地点では、日本一大きな盆地である横手盆地が一望できた。

正午頃に真昼岳山頂に到着し、そこで昼食を摂った。山頂からは秋田駒ヶ岳や和賀岳を望むことができ、素晴らしい展望だった。午後 1 時頃に下山を開始し、午後 4 時前に赤倉登山口手前の鳥居に到着した。

今回の山行の総括をすると、真昼岳は標高 1059 ㍎と比較的低いものの、麓から登っていくので、結構登りごたえがあった。また、ブナの原生林をはじめ、様々な花や植物が咲き乱れ、花の山といっても過言では無かった。機会があれば、他の登山コースも使用してみたい。尚、ハエやブヨ等の虫が多いので、虫除け対策は必須である。

『山岳』から読み解く明治・大正・昭和戦前の会員たち

鳥山文蔵

日本山岳会の機関誌『山岳』は、創立の翌年に第 1 年第 1 号（明治 39<1906>年 4 月）が創刊され、戦前最後は第 37 年第 1 号（1943<昭和 18>年 9 月）まで発行された。この間に発行された『山岳』をめくると、我が宮城にまつわる様々な記録も記載され、^{いにしえ}古の時代が蘇えってくる。こうした記録から明治、大正、昭和戦前に日本山岳会に入会した地元在住の会員を調べてみた――。

◆宮城県在住の最初の会員は誰か？

今から 117 年前の明治 38（1905）年に創立した日本山岳会に、宮城県で初めて入会したのは一体誰なのだろうか？

『山岳』第 1 年第 1 号に 116 名の会員が記載されている。その中に「宮城県・南部洋」という人が一人載っている。どういう人物なのか詳しく分からないが、名前から推察すると伊達藩に近い南部藩（盛岡藩）の末裔か、それに近い人なのだろうか。また彼は純粹に山登りに興味があったのか、それとも高山植物とか民俗に関心を寄せ入会したのだろうか。何れにしても「南部洋」氏が、宮城県在住で最初の日本山岳会員であることは間違いない。

因みに、この名簿に載っている東北関係者は、南部洋氏と「岩手県 小笠原謙吉」氏の 2 人のみである。小笠原氏は、戦前に「柴波郡昔話集」を出筆していることから、民俗分野に興味を示し日本山岳会に入会したのかもしれない。

◆明治末期入会の会員たち

このあと日本山岳会に入会する宮城県人は、数は少ないが徐々に増えていく。次の『山岳』第1年第2号（明治39年6月）に132名の新入会員が載り、その中に「飯柴永吉」氏と「金野甚五郎」氏の2人がいる。金野甚五郎氏については詳しく分からないが、飯柴永吉氏は地元の東北学院の教員として植物調査に勤しんだ人物である。

この当時、日本山岳会には登山志向の会員と植物、とりわけ高山植物に興味を抱く会員が入会したことから、飯柴氏もそのグループの会員と言える。植物学同志会に所属した彼は、『山岳』第4年第1号（明治42年3月）に「信濃植物採集略記」、『山岳』第4年第3号（明治42年11月）に「早池峰及白馬植物採集案内」、また『山岳』第13年第2号（大正8年4月）には蔵王で遭難した旧制仙台二中について「蔵王山凍死事件につき」と題し寄稿している。このほか大正4（1915）年5月8日に開催された（旧制）二高山岳会の大会（当時、日本山岳会が山岳写真や登山用具などを展示する大会を催していた。それに倣って開催されたものだろう）に飯柴会員が採集した高山植物の鉢を数種出品している。東北のみならず日本アルプスの高山植物を採集し、また仙台で山岳関係の催しに協力したり、執筆活動にも励んでいたことが窺える。

続いて明治40（1907）年6月に発行された『山岳』第2年第2号をめくると、宮城県在住の2人が会員になっている。「久保田正〇」氏と「山田直一」氏である。この2人の素性は残念ながら分からない。

次に出てくるのは『山岳』第4年第1号である。この中に新入会員として「宮城県仙台市山砲兵第一大隊 河村多郎」氏ひとりが載っている。当時として現役軍人が日本山岳会員になるのは珍しい。本人自身が登山に興味があったのか、それとも「山砲兵第一大隊」に所属していることから山岳戦の参考になると上官から勧められて入会したのだろうか。この所属隊名から察すると、後者のような気がしてならない。この頃から『山岳』に載る新入会員は、出身県ばかりでなく職業も列記され、少しは会員のプロフィールが分かるようになる。

◆大正時代入会の会員たち

宮城県在住ではないが、宮城県人にとって忘れてはならない岳人が入会する。その人は仙台市生まれの「榎有恒」氏である。『山岳』第9年第3号（大正4

年 3 月) に彼が新入会員として載っている。表記されている住所は「東京市本郷区真砂町」、紹介者は中村清太郎、高野鷹蔵の 2 人、大正 3 (1914) 年 2 月入会で会員番号は「341 番」。まだ慶應義塾生の若い学生なので、新入会員紹介で一番最後に記載されていた。

大正 9 (1920) 年 2 月に発行された『山岳』第 14 年第 1 号に年会費納入者があり、宮城県在住者では、飯柴永吉、河村多郎のほかに井上良一、蜷川睦之助、佐藤武雄、角倉邦彦の名前が載っていた。翌同 10 (1921) 年 12 月に発行された『山岳』第 16 年第 2 号に「会員名簿」が掲載されている――

- ・河村多郎 (大正 5 年 5 月入会・会員番号 173) 宮城県栗原郡金田村河口中町
- ・佐藤武雄 (明治 42 年 7 月入会・会員番号 213) 宮城県栗原郡若柳町
- ・蜷川睦之助 (大正 3 年 3 月入会・会員番号 344) 北海道石狩区夕張町
- ・井上良一 (大正 7 年 1 月入会・会員番号 583) 東京市渋谷・慶応寄宿舍

次に昭和 4 (1929) 年 12 月発行の『山岳』第 24 年第 2 号に載った「会員名簿」を見ると――

- ・佐藤武雄 (前記・会員番号 866)
- ・岡田要之助 (大正 7 年 5 月入会・会員番号 606) 仙台市東北帝国大学理学部生物学教室)
- ・中村左衛門太郎 (大正 8 年 8 月入会・会員番号 681) 仙台市二本杉通
- ・第二高等学校山岳部 (大正 15 年 2 月入会・会員番号 965) 仙台市北六番町
- ・山田俊雄 (大正 15 年 2 月入会・会員番号 994) 仙台市東三番町 二高忠愛之友倶楽部

と、大正時代入会の方々が載っていた。その中で佐藤武雄会員の入会番号が「213」から「866」に変っている。一時日本山岳会を退会し、再入会したのだろうか。この中にある「岡田要之助」会員は、宮城県生まれで 23 歳のとき入会している。彼は東北帝大理学部卒業後、東京帝国大学理科植物学科に進む。このとき来年 NHK 朝の連続ドラマの主人公となる牧野富太郎博士が作った横浜植物会に入り、採集に励んだ。そのあと故郷に戻り東北帝大の教授となる。彼も植物に興味があって日本山岳会に入会した一人であった。その一方、この頃初期会員の南部洋、飯柴永吉、山田直一、久保田正〇の名前が見当たらなくなる。大正末

までに退会したのか、それとも亡くなってしまったのだろうか・・・。

◆昭和戦前までの会員たち

昭和 4 年 9 月発行の『山岳』第 23 年第 3 号に新入会員紹介欄があり、そこに元村勲（仙台市・会員番号 1122）、青木廉（仙台市・昭和 4 年 5 月入会・会員番号 1123）、木村有香（仙台市・会員番号 1125）の 3 名が載っている。

また前記の『山岳』第 24 年第 2 号にある「会員名簿」を見渡すと――

- ・元村勲（昭和 4 年 5 月入会・会員番号 1122）仙台市米ヶ袋広丁 瀧島方
- ・青木廉（前記）仙台市北二番町
- ・木村有香（昭和 4 年 6 月入会）仙台市東北帝国大学理学部生物学教室

の 3 名が入会している。大正末期から興味深いのは「学都仙台」らしい会員が際立ってきたことである。東北帝国大学（現・東北大学）理学部生物学の 2 人をはじめ、（旧制）第二高等学校山岳部と学生が同じ年月に入会している。

この後、機関誌『山岳』の「新入会員紹介」欄から探すと、昭和 6（1931）年 7 月発行の第 26 年第 2 号に、津野清也（会員番号 1262：仙台市霊屋下）、昭和 7（1932）年 5 月発行の第 27 年第 1 号に柘田定司（同 1350：仙台市片平町）が載っている。この柘田会員は昭和 6 年、谷川岳岩壁登攀で名を馳せた小川登喜男、そして田名部繁の東北大パーティ 3 名で谷川岳幽ノ沢右俣の第 2 ルンゼ・ルートを切り拓いたメンバーの一人である。東北大学冶金学科出身の柘田は本多光太郎博士と、かの有名な「山内ピッケル」製作者である山内東一郎氏に、ピッケルやアイゼン製作の指導、助言をした人物でもある。また彼は山岳雑誌『ケルン』昭和 10 年 6 月号に、「ピッケル及びシュタイグアイゼンの組成と鍛錬」と題する論文を発表、ニッケル・クローム鋼の利点を述べている。

それから年を経た昭和 13（1938）年 9 月発行の第 33 年第 1 号に永野賢一（同 1745：宮城県石巻中学校）、昭和 16（1941）年 3 月発行の第 35 年第 2 号に佐々木佐太郎（同 1848：仙台市北材木町）が載っている。戦時色が濃くなる昭和 17（1942）年 6 月に発行された第 36 年第 2 号に、東北薬学専門学校山岳部・代表者：神久策（同 1922）が、前記の佐々木佐太郎が紹介者となり載っていた。ここまでが戦前最後の入会者である。

こうして明治、大正、昭和戦前まで 37 年の間に入会した先人たちを振り返る

と、「学都」、「軍都」と呼ばれた仙台を象徴するような会員の横顔が見受けられる。ある意味、宮城支部のパイオニアたちである彼らの一途な山への想い、また植物研究でさらに視野を拓けようとする意欲を感じずにはいられない。現在、宮城支部は日本山岳会への入会者が増えず、尚且つ高齢化という頭の痛い問題を抱えている。今回、先人たちの歩みを遡ってみて、“あまり嘆かず、力を合わせて前に進みなさい”と、勇気を与えられたような気がしてくる。

宮城支部定例事業の概要

（１）令和４年度通常総会の開催

令和４年度の通常総会は、新型コロナウイルスによる感染者が高止まりの状況にあり、書面による開催となりました。会員３２名に送付した各議案に対し賛否を記入してもらうハガキを同封、返信していただきました。その結果、２１名より書面表決議提出があり、提出者が２分の１（１６名）を超え総会は成立しました。そして令和３年度事業報告（賛成２０名、承認１名）、令和３年度収支決算報告（賛成２０名、承認１名）、令和４年度事業計画案（賛成２１名）、令和４年度収支予算案（賛成２０名、無効１名）は、規定に基づき過半数以上の賛成（承認）で、各議案は何れも原案通り可決されました。

（２）月例支部役員会の開催

定例支部役員会を下記の日程でシルバーセンター５階会議室において開催。
６月２２日（火）、７月１４日（水）、１０月１３日（水）、１２月２２日（水）、３月１６日（水）。尚５月、９月、１月、２月（メール）の役員会は、新型コロナウイルス感染拡大のため中止。尚、１１月役員会は山岳古道調査特別委員会に変更した。

（３）支部会報の発行

支部会報として「宮城山岳通信」及び「宮城山岳」を、下記の通り発行した。

○「宮城山岳通信」（令和３年度分）

第２３号（令和３年４月２０日）、第２４号（令和３年９月１０日）、第２５号（令和４年１月３０日）３回発行

○「宮城山岳」第２５号（令和３年８月２０日）

宮城支部収支会計報告

(1) 令和3年度 収支決算書

収入の部

(単位：円)

科 目	当期予算額	当期決算額	増減額	備 考
①前期繰越金	139,110	139,110	0	
本部から運営交付金	70,000	68,000	－2,000	会員数34名×2,000円
法人からの寄付金	0	44,897	44,897	他山岳会からの寄付
支部友会費	39,000	12,000	－27,000	支部友4名@3,000円
支部行事参加費	50,000	30,000	－20,000	延べ60名×500円
雑収入	5,000	7,200	2,200	
②収入合計	164,000	162,097	－1,903	
③総収入(①＋②)	303,110	301,207	－1,903	

支出の部

科 目	当期予算額	当期決算額	増減額	備 考
支部報酬・謝礼金	0	0	0	
旅費・交通費	30,000	0	－30,000	全国支部懇談会中止
通信費・運搬費	40,000	15,546	－24,454	切手・はがき等
会議費・会場借用費	15,000	9,640	－5,360	シルバーセンター会議室
消耗品費・コピー代	45,000	35,768	－9,232	インク・コピー用紙代
印刷製本費	68,000	39,400	－28,600	山岳通信メール配信へ
支払手数料	3,000	0	－3,000	
慶弔費	10,000	0	－10,000	
雑 費	0	0	0	
その他(上記以外)	92,110	0	－92,110	
資産購入代金	0	0	0	
④支出合計	303,110	100,354	- 202,756	
次期繰越金(③－④)	139,110	200,853	61,743	

(2) 令和4年度 収支予算書

収入の部

(単位：円)

科 目	前期予算額	当期予算額	増減額	備 考
①前期繰越金	139,110	200,853	61,743	
本部から運営交付金	70,000	66,000	- 4,000	会員数 33 名×2,000 円
法人からの寄付金	0	0	0	
支部友会費	39,000	40,000	1,000	
支部行事参加費	50,000	60,000	10,000	
雑収入	5,000	5,000	0	
②収入合計	164,000	171,000	7,000	
③総収入 (①+②)	303,110	371,853	68,743	

支出の部

科 目	前期決算額	当期予算額	増減額	備 考
支部報酬・謝礼金	0	0	0	
旅費・交通費	0	25,000	25,000	前期全国支部懇談会中止
通信費・運搬費	15,546	30,000	14,454	切手・はがき等
会議費・会場借用費	9,640	15,000	5,360	シルバーセンター会議室
消耗品費・コピー代	35,768	45,000	9,232	インク・コピー用紙代
印刷製本代	39,400	53,000	13,600	宮城山岳通信
支払手数料	0	3,000	3,000	
慶弔費	0	0	0	
雑 費	0	0	0	
その他 (上記以外)	0	200,853	200,853	予備費
資産購入代金	0	0	0	
④支出合計	100,354	371,853	271,499	
次期繰越金 (③-④)	200,853	0	- 200,853	

編 集 後 記

“山高きが故に貴^{たつと}からず”という諺^{ことわざ}を最近、よく耳にします。平たく言えば、“標高が高いからと言って名山とは限らない。標高の低い山にだって魅力があるよ”ということでしょう。今回、紀行・エッセーに載っている太白山並びに真昼岳は、それに相応しい山ではないでしょうか。

ところで、ここ最近、山間地での風力発電建設計画が持ち上がり、豊かな自然が危機にさらされています。再生可能エネルギーの促進は理解できますが、自然や生態系を蔑^{ないがし}ろにする計画には賛同できません。前記の“山高きが故に貴からず”の後に、“樹あるをもって貴^{とうと}しとなす”という言葉が続きます。即ち、“山は水源となる木々が生い茂っているから尊い”と教えている。この自然の尊さを問いかけている諺を今一度胸に刻みたい。

(会報・編集出版委員長 鳥山文蔵)

公益社団法人 日本山岳会宮城支部会報

宮城山岳 第26号

発行日 2022年7月30日

発行者 鳥山文蔵

編集者 鳥山文蔵、千石信夫、冨塚和衛、細川光一、三宅泰

事務局 〒983-0821 仙台市宮城野区岩切字畑中9-12

(冨塚宅) TEL 090-2790-3771



モンブラン（シャモニーから）